

め候はん事如何とあり。慶次左候へば不面白候とて強て所望す。和尚は沙門に不似合事なればとて、態とあて候として爪弾を當らるゝ。さて二番目は慶次思ふやうに勝つ。さらば我等にもしつぺい御當候へと被望。慶次申候は、御僧様へしつぺい當候事は、佛身を破るに同じ、後世にも恐れ候と云。和尚それは其筈にてなし、其身へはしつぺい當、我はしつぺい不當は道に違ひたり、是非うけんとなり。慶次、左候はゞ乍恐當申さんとて拳を握りすまし力に任せ、和尚の目と鼻の間をしたゝかにはつたり。和尚は氣を取失ひ、颯ながら、是は〜と云内に慶次は行方しらず逃去けり。扱此由を栗生・志賀等へ語しかば、皆まつばに入て笑けり。關原陣の時慶次於奥州の指物は、自練の四半に大ふへんものと書付たり。人々申は、上杉家武勇なるに、かく押出し大武邊者とは不_レ思寄指物也と咎しかば、慶次から〜と打笑ひ、扱て〜何もは文盲かな、假名の清濁だに不_レ知。我等事久々浪人にて金銀なき故、大不辨者と申事なり。讀様あしくかく宣ふは誤也と申けり。又會津へ笠仕の時より、皆朱の柄の鎧を爲持ありく。昔より皆朱の鎧と玳瑁の

鎧とは、武功勝れねば持する事を不許、相組の者共咎之。是は我等先祖以來の鎧也、かゆる事ならずと云。そこにて水野藤兵衛・薙塚理右衛門・宇佐美彌五左衛門・藤田森右衛門等訟て云。多年奉望候得共、我等には皆朱の槍御免無之、新參の慶次朱柄の鎧持する事遺恨に候間、我等も朱柄の鎧御免可被成候。無左候はゞ慶次に朱柄を止候様に被仰付可被下候と云。直江山城守兼續其頭なれば、内意にて色々異見すれども不聽。因之慶次にも改て皆朱柄御免とあり、藤田・薙塚・宇佐美・水野にも御免ありしが、慶長五年九月二十九日最上陣洲川と云處にて、慶次と薙塚・宇佐美・藤田・水野五人一所に朱柄にて鎧を合す、希代の珍事也。慶次其日の出立は、黒糸威しの鎧に猩々緋の羽織、金のいらたかの珠敷に、金の瓢を付たるを襟にかけ、鐵澁の山伏頭巾の冑、十文字の鎧を提げ、黒の馬の野鬚なるに金の山伏頭巾をかぶらせ、唐鞆かけて乗たりけり。松風の名馬を京にて夏の頃、毎夕河原へ冷しに出ける。其馬捕の腰に烏帽子を付させたり。路にて往來の大名・小名に逢時、見事なる馬なれば立戻り、誰の馬ぞと尋るに

彼馬捕、その儘烏帽子引かぶり足拍子を踏で「此鹿毛と申は、あかいちよつかい草袴、茨がくれの鐵冑、鶏のとつさか立ゑぼし、前田慶次が馬にて候」と幸若を舞ひ率通る。人の尋る度に如此。又或時慶次錢湯の風呂に入、頬かぶりして忍入り、下帯に一尺許の脇刺を指て入る。入込の鞞すはや曲者よ、爰にて風呂に入らば、恐れて不入といはれんとて、皆脇刺をさして風呂に入れり。數刻過て慶次は板の間へ出で、彼小脇指をすらりと抜たるを見れば竹のへら也。足の裏の垢をこそげける。入交の人々腹を立て、扱々出し抜に逢て秘藏の脇刺を風呂へさして入り、柄も下緒も役に不立、身は汗かきなまりて皆廢りたりとて憤たるとかや。

關原陣の後上杉景勝百萬石を召放、只三十二萬石に成り米澤へ所替、家中大形暇出る。慶次は元來覺の者、殊に最上口の鎧にて高名の譽天下へ聞え、七八千石にて抱度と云人々數多なり。慶次云。天下に我主は景勝の外には一人もなし。其仔細は、石田治部一味の大名小名、關原にて上方負候といなや、人質を渡し便を求め降參して、立足もな

く淺間敷鉢也。此衆を主に取事は堅くいやなり。夫家康公譜代の衆は、近頃迄又者也。それを主には猶以ていやなり。越前の黃門か、尾張の下野か、扱は景勝より外なし。關原にて味方敗北しけれども少も弱氣を見せず、一言の降を不許、翌年四月迄ひたと合戦せられしを見れば、大剛の大將は景勝也。主には上あるべからずとて景勝の家を不出、子息彈正大弼忠勝迄長命にて罷在、米澤にて病死しけるとなむ。

一、長瀬小右衛門の素生

大坂陣の時細川玄蕃頭興元、鎧を合すると申上候。家康公仰には鎧を合すると云事、左様に切々あるものにあらず。此茶白山の北にみえたる勝曼院の山にて、佐久間不干・筒井順慶・荒木村重楯籠る大坂門跡顯如上人攻候時、本の鎧合たると聞及びたり。其外上方にての鎧は大形聞及に、勝曼院の鎧は昔より云傳たる杉なりの鎧と聞たりと被仰候。佐久間備前守進出、上意の通に同姓不干手にて、其後は兩度鎧御座候。天正六年五月三日の合戦にて御座候。朝は茶白山の西にみえ候難波の貝殻塚の合戦にて、不干が與力佐久